

# 白亜宮の陰影

デルフィニア戦記 3

茅田砂胡

中央公論新社



### 目次の操作方法について

・表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わります。ここでクリックすると、該当の頁までジャンプさせることができます。

カバーイラスト	沖 麻実也
挿 画	しいばみつお (伸童舎)
カバーデザイン	
タイトルロゴ・マークデザイン	
水野デザインルーム	
地図作成	矢口 令

## 目次

1	—————	9
2	—————	29
3	—————	59
4	—————	66
5	—————	72
6	—————	114
7	—————	127
8	—————	136
9	—————	150
10	—————	181
11	—————	190
あとがき	—————	227



コーラル付近図

パキラ山脈

トレニア湾

至るマレバ

ロア

セナ高原

ポリシア平原

パキラ山脈

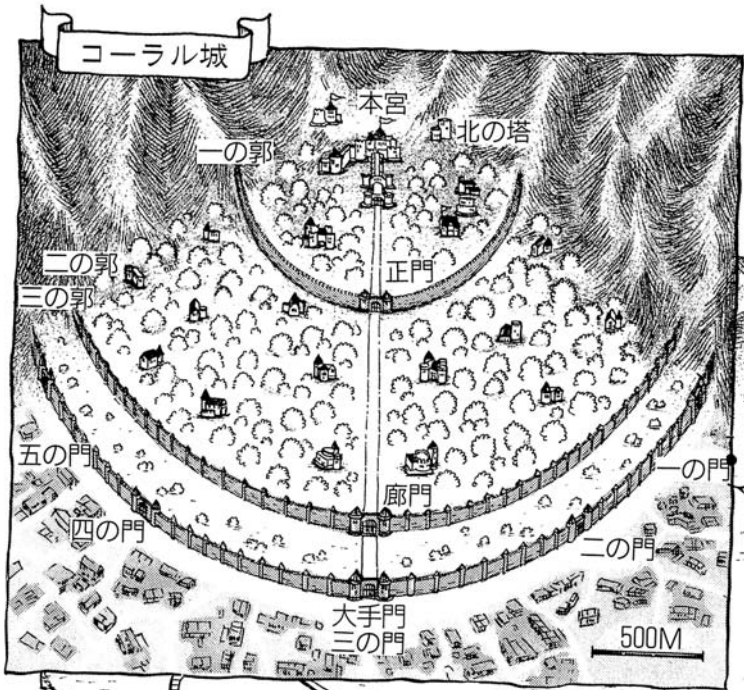
コーラル

マレバ

山脈



コーラル城



河

ロシェの街道

ペンタス

ビルグナ

キ

ル

ッ

イ

ポートナム

デルフィニア国内図

ウォル（ウォル・グリーク・ロウ・デルフィン）●現デルフ  
イニア国王。ただし改革派に座を追われ、流浪の身で  
ある。デルフィニア王家の紋章の獅子を掲げている。

リィ（グリンディエタ・ラーデン）●異世界から落ちてきた少女。  
華奢で可憐な外見とは裏腹に無双の剣の腕と戦士の魂を持つ。

イヴン●タウの自由民。ウォルの幼なじみで、親衛隊長を務める。

フェルナン伯爵●ウォルの養父で後見役。

現在は王宮の北の塔に囚われている。

ドラ將軍●伯爵。フェルナンの親友。

シャーミアン●ドラの娘。女騎士。

バルロ●サヴォア公爵。ティレドン騎士団長。

ナシアス●ラモナ騎士団長。バルロの親友。

ブラン ニモ フレッカ サルジ ジョグ

ダリ アザレイ●タウの自由民。親衛隊士。

ガレンス●ラモナ騎士団副団長。

タルボ●ドラの副官。

ルカナン●近衛兵団第一軍第二連隊大隊長。

ブルクス●侍従長。先王時代は優秀な外交官であり側近でもあった。

アヌア侯爵●前・近衛兵団司令官。国王派の

ため改革政府派によって蟄居させられている。

ヘンドリック伯爵●国内屈指の豪傑で、国王派。蟄居の身。

カリン●女官長。

ペールゼン侯爵●ウォルを追放した改革政府派の中心人物。

サング●近衛兵団司令官。改革政府派。

タミュー男爵●財務長官。改革政府派。

チフォン●タミューの息子。改革政府派。

ジェナー●祭司長。改革政府派。

ドゥルーワ王●先代デルフィニア国王。7年前に逝去。

アエラ姫●ドゥルーワの妹。バルロの母。

# 白亜宮の陰影

デルフィニア戦記 3

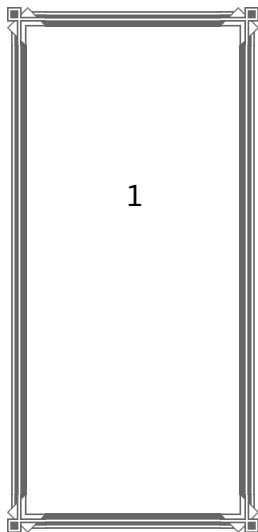
A RECORD OF THE  
Sethmian Wars





ワイベツカーの戦いから四日目の昼。  
追放中の国王を大将とする国王軍は、残務処理に  
追われる忙しい日々を過していた。

大勝利を収め、城を占拠したのはいいが、こちらの倍とも思える軍勢がほとんど降伏してきたのだから、後始末も並大抵の労力ではない。その降伏に偽りのないように思えるものは指揮下に置き、疑わしきものはいちおう遠ざけ、あくまで抵抗しようというものは見張りをつけて押しこめた。こまかい審査



はできない。大ざっぱな選別だが、それでも一段落つくまで時間がかかった。

もつとも、敗残兵の処理に頭を悩ませていたのは一部の将校たちで、兵士たちはそれぞれに報酬ももらい、次回に備えて馬や武器の手入れに励んでいたのである。

「あの王様もなかなかたいしたもんじゃないか」

「おうよ。これで味方は一気に倍だぞ。一両日中にはコーラルへ向けての進軍もはじまるだろう。いよいよもって働き時だ」

奇跡の勝利に兵士たちの意欲も満々である。

武器の手入れだけでなく、空いた時間を使って体のほうもこざっぱりと整える。あるものは髭ひげを剃り、あるものは水浴びを楽しんでいる。

まだ、川で泳ぐには早い季節だが、死にものがるいの戦闘をくぐり抜けた後だ。攻め落とした城のまわりで水浴びを楽しむ兵士たちの姿がずいぶん多く見られた。

のどかな光景である。

国王軍の中でも異彩を放っているタウの男たちもまた、城から離れた森の中に気晴らしに来ていた。

ワイベツカー城は自然に恵まれた風景の中に建っている。少し城から離れれば濃い緑が広がり、ひんやりと森に抱きすくめられる深い泉がある。

しかし、目的は水浴びの他にもあったらしい。

全裸の彼らはそれぞれ、戦の合間の休息にも似合わない深刻な顔をしているが、その中でも若頭ともいべきツールのブランが、泉に身を沈めながら低い声で言った。

「そうすると、なんですかい。コーラルの奴ら、王様の親父さんの命を盾に取ってきたわけですかい？」

「そういうことだ。伯爵の命が惜しければこれ以上、進んで来るなど言いたいんだらうよ」

こちらはタウの男たちの首領格、イヴンである。

若頭より首領のほうが二十近くも若い。

実際、イヴンは彼ら八人の中で一番若かった。

細身ながらも鍛えあげた体軀を惜しげもなくさらして、水の手ざわりを楽しんでいる。

こんもりと生い茂った木立が彼らのいる泉を隠し、岩肌を伝って流れ落ちる水が小さな音をたてている。他はしんと静まり返っている。

カジクのニモが顔をしかめながら言った。

「しかしまあ、ぞっとしませんな。そういうのが上の連中のやり方ですかい」

「それで王様はどうするんで？　ここで軍勢を止めるんですかい」

「そうもいかない」

水に濡れた手でつるりと頭を撫でたイヴンだった。短い金の髪が頭皮に張りついている。

「こういう要求はひとつ呑むともうきりが無い。進軍をやめるだけですむもんか。全面降伏はもちろん、あいつ一人でコーラルへ来るように注文をつけてくるだらうよ」

「ですけど、王様にとつちや実の親父さんみたいな人なんでしょう?」

「実の父親以上の父親だ。奴らもそれをわかっているからこんなことを言ってきたんだろう」

レントのサルジが肩をすくめた。

「しかし、考えるのは俺たちの仕事じゃない。俺たちや副頭目の指示に従うまでだ」

「サルジの言うとおりだ。あんたの意志はどうなんですか?」

「俺はウォルの決めたことに従うさ。そのためにここにいる」

「じゃあ、王様の意見はどうなんですか?」

「それさ。あの馬鹿のことだ。軍の指揮は誰かに任せて、自分一人で王宮へ乗りこむくらいのことはいかならないからな」

他の七人がいっせいにため息をついた。

一人が擲<sup>や</sup>擲<sup>ゆ</sup>する目でイヴンを見たものである。

「あんたも苦労しますな」

「まったくだ」

真剣に答えたイヴンだった。

「ドラ將軍の心配性が俺にも移りそうだ。ちくしうめ。かといつて放つとくわけにもいかなえからな。そこるところを汲んどいてくれ」

男たちは顔を見合わせた。

鼻の頭を搔<sup>か</sup>きながらブランが言う。

「つまり、俺たちで王様のすることに目を光らせていろと、そういうことですかい?」

「そういうことだ。まあ、こんなことはドラ將軍もラモナ騎士団長もわかっているだろうがな。昼間は將軍たちが見張つてるからいいとして、問題は夜中だ」

「あんな大きな人がこっそり陣營を抜け出そうとしたって必ず誰かが気づくでしょうに」

当然の疑問だが、イヴンは首を振った。

「あの野郎はな、あの図<sup>ず</sup>体<sup>たい</sup>でもやろうと思えば山猫みたいに足音を殺して歩ける。お前たちと同じよう

にな。スーシャの森を歩くのには必要な技だったが、都会育ちの騎士さんたちにはとても追いきれまい」

「ははあ……」

「惜しいもんですな。軍勢の先頭なんぞに置いとくより、タウの旗の下に置きたい人だ」

冗談混じりの口調だったが、イヴンだけは真剣そのものだった。

「あいつの命はもうあいつ一人のものじゃない。それがあの馬鹿にはいまだに呑みこめていないときていやがる。だったら、まわりが何とかしてやるしかないからな」

男たちは一瞬、押し黙った。

彼らの若い首領はかなり真剣に、あの国王の独断行動を懸念しているらしい。

ブランが低く笑った。

「確かに、国王のいない国王軍など洒落しゃれにもなりませんや」

「気をつけましょう」

「すまねえな。こんなことは本来タウの自由民の仕事じゃないってのはわかってるんだが……」

「なあに。相手が山猫なら俺たちの得意でさあ」

「いやにどでかい、王冠つきの山猫ですかな」

静まり返った泉に男たちの笑い声が響く。

その声はやむのと同時に岩場の上から澄んだ声が降ってきた。

「さすがは幼なじみだな。よくわかってる」

まったく気配を感じさせなかったその声に男たちは一瞬緊張したが、上を見上げたイヴンが苦笑しながら言ったものである。

「のぞきとは趣味が悪いぜ。リイ」

男たちの入浴を岩の上から見下ろしているのは、ワイベッカーの戦いで奇跡の勝利を呼びこんだ少女だった。

山猫のように気配を消して歩くのはこの少女も同じである。タウの山賊さんぞくよりスーシャの野生児より、この少女のほうが獣じみているかもしれないなかった。

その少女は足下に裸の男の大群を見ながら平然と言ったものである。

「何でのぞき？ 覗いたところで別におもしろくない。混ぜてよ」

「えっ？」

「おい、ちよっ……」

男たちが慌てふためくのを尻目に、少女は手早く靴を脱ぎ捨てて剣帯をはずし、上着とズボンを脱ぎ捨て、胸に巻いたさらしの布さえ取り払って全裸になり、勢いよく泉に飛びこんできた。

「うわ！」

慌てたのは男たちのほうである。

こちらはそれぞれ三十から四十にかけてのいい大人であり、相手は十三歳の少女だ。別に赤くなるほど純情でもないのだが、いかんせん、双方ともに糸も纏わぬ姿である。

「嬢ちゃん！」

皆、おおいに焦<sup>あせ</sup>った。ほとんどが慌てて泉から飛

び出して服を拾い上げたが、少女は平気な顔で、器用に立ち泳ぎをしている。

「気持ちいい。蒸し風呂なんかより、こっちのほうが絶対いいな」

「おい、リイ……」

逃げ遅れたイヴンが頭を抱えながら言った。すでに腰が引けている。

「そんなことよりちよっとは遠慮しろ」

「なんで？」

「なんでつてお前……」

複雑な心境だった。相手はほんの子どもだ。何も焦ることはないとわかつてはいても、なにしろ自分を軽々と両手に抱えるほどの怪力の持ち主である。

自然、対応も微妙なものになる。

「お前もいちおうは女なんだからな。裸の男がごろごろしてるところにそんな格好で飛びこんで来るんじゃない。嫌でも見えちまうだろうが」

「別に見られてもかまわないけど？」

「お前がよくても俺たちが困るんだ！ 男の体にも見られたくないものがあつてだな！」

完全に逃げ腰になっている。

しかし、少女はかわいらしく首をかしげ、水面下に隠れている相手の下半身にちらりと目をやって、こう言った。

「別にそんなもの珍しくもないよ。ぼくにだって、ちよつと前までついていた」

あんぐりと絶句したイヴンの頭上から、またあらたな声が降ってきた。

「おお。おそろいだな」

「ウォール！」

その際にイヴンは急いで泉から這い上がった。

むろん、他の男たちは快く国王に道を譲つたのである。

「何だ、お前。会議はどうなった？」

イヴンの幼なじみにしてデルフィニアの国王、ウォール・グリークは、はた目にも疲労の浮いた顔をし

ていた。三日の間、残務処理に追いまわされたのがよほどこたえたらしい。大きな身体にもいくぶん力がなく、目の下には隈くまが浮いている。

「一段落というところだな。やれやれだ。戦闘のほうがよほど楽でいい。やつと隙を見つけて抜け出した」

並いる監視を振り切つて、もしくは気づかれずに脱走してきたということだ。

泉の中から少女が手を振っている。

「ウォール。気持ちいいよ。泳がない？」

「そうだな。ご一緒するか」

止める暇もなかった。これまたあつという間に全裸になって国王は泉に飛びこんだものである。

男たちはあつけにとられてその様子を見守つた。

正確にはいつまでも覗いてはいられないので、二人が水浴びを終えて出て来るまで、岩場で待機することになった。

二人の楽しそうな声が聞こえてくる。



ブランがほとほと呆れたように言ったものだ。

「あの王様、やっぱりどこか普通と違いますな」

イヴンが苦虫をかみつぶしたような表情で答えた。

「だからまわりが苦勞するんだ」

その泉は少し踏みこめば足の立たなくなるほどの深さがあったが、二人は水泳には自信があるようである。楽々と泳ぎまわり、岩へ這い上がって一休みしていた。

濡れた髪を絞りながら少女が言う。

「スーシャって森の中だって言わなかった？」

「そのとおりだ」

「それにしては泳ぎがうまい」

「ああ。大きな湖があつて、夏はいつもそこで泳いでいたからな。半日泳ぎ続けたこともある」

見上げれば木漏れ日が美しい。

睡眠不足の目には眩しく映ったのか、国王は少し

目を細めた。隣にはやはり裸の少女が岩に腰を下ろしている。

いまさらその姿が眩しく見えるはずもないのだが、男は少女を見ようとはせず話しかけた。

「リイ」

「なに？」

「コーラルの言い分をどう思う？」

少女も男を見ようとせず上うへの空で答えた。

「まあ、たわごとだろうね」

「だろうな」

「ペールゼンだつてまさか君がこのこ出て来るとは思っていないよ。あれはただの牽制けんせいだ」

「だろうな」

こちらも上の空である。

しばらくして男が低い声で言った。

「しかし、このまま軍勢を進めれば、いずれは牽制でなくなる」

「だろうね」



マレバを解放し、近衛兵団を打倒し、コーラルに足をかけたところで、伯爵は絞首台に乗せられることになる。

二人は難しい顔で考えこんだ。

「リイ」

「なに？」

「コーラルの要求を呑むわけにはいかないだろうな？」

「いかないね。それは馬鹿のすることだ」

これにははつきり断言した少女である。

男にもわかつていた。

そんなことをしようものなら徒いなずらに改革派を喜ばせてやるだけのことなのだ。

「王様のいない国王軍なんか洒落にもならない。おまけに君を人質に捕れたらもう終わりだ。こっちは全面降伏するしかない」

「わかつている。俺は軍を離れられんし、軍勢をここで止めるわけにもいかん」

「だろうね」

「しかし、父を見殺しにもできん」

「將軍たちはなんて言ってる？」

男は特大の拳こぶしを握りしめ、低く唸った。

「伯爵を見捨てるべきだとそう言っている」

ドラ將軍にとってフェルナン伯爵は旧知の友であり、ぜひとも生きて再会したい人のはずだった。

しかし、大義の前に公私を混同するような將軍ではない。

少女は足の先でぱしゃんと水面を打った。

「当然だろうね。伯爵本人もその覚悟はしているはずだ」

二羽の小鳥が心地よい声でさえずりながら、舞うように飛んでいる。

ぬけるような青空に、ぽっかりと雲が浮かんでい

る。どのくらいそうしていたのか、ほどいた少女の髪が乾きかけるころになって、男はようやく口を開い

た。

「リイ」

恐ろしく重い声だった。

「なに」

「頼みがある」

「だから何」

深く息を吸いこんで、男は一気に言った。

「俺の代わりにコーラルへ行ってもらいたい」

「いいよ」

あまりにあっさり言われたので、男のほうが拍子

抜けした。

「おい、そう簡単に……」

少女はにこりと笑ったものだ。

「馬鹿だな。四日もそんなことで悩んだのか？　は

じめからそうする予定だったじゃないか」

出会ったばかりの時から、この少女は二人でフェルナン伯爵を助けに行こうと言っていた。男の素姓が国王とわかると、今度は男は軍の指揮のために残

し、一人で行くと公言していた。

だが、男は難しい顔で首を振った。

「あの時とは状況がまったく違う。ああは言ったが、決してお前を信じていないわけではなかったが、あの時は父の救出はまだ話だけのことだったのだ」

とうてい実現不可能な目標を掲げることので、この男は自らを奮い立たせ、行動の糧かたとしてきたのだ。

しかし、今の男はまがりなりにも一軍を指揮する身となり、その目標を実現できるかもしれないところまできた。そうなればあくまで軍勢をもって改革派と戦い、王都を奪回し、秩序を築き、父親を取り戻すのが正道というものなのである。

「俺の生還を聞いた時には、まだコーラルは高たかをくくっていただろう。たった一人で何ができるかと鼻で笑っていたはずだ。しかし、今となつては状況がまったく違う。こんな悪辣な手段を平然と用いるほど、連中は目の色を変えて俺を叩きつぶそうと図はかっている。都市の警備も父の監視もどれほど厳しくな

っているかわからん」

どれだけ危険が増していることか。男はそう言いたいらしい。そんな中へ少女一人をやるのは耐え難いと苦悩しているのだ。

だが、少女は首を振った。

「改革派に正攻法が通用しないのはわかりきってるんだ。それに、誰がどう考えても、この仕事にぼく以上の適任者はいないはずだ」

さらに深いため息が男の口から洩れた。

「俺はお前に助けられてばかりだ。まったく、こう続くと自分が情けなくなる」

「王様は、そんなことを気にしちゃいけない」

真理である。

しかし、素直に領けない王様は、少しばかりいじけて十一も年下の戦友に愚痴をこぼしていた。

「では何か。俺の代わりに敵地の真つ只中まで出向いて父を救って来いと、そっくり返って命令すればいいわけか？」

少女は楽しそうに答えたものだ。

「そうしたらおれはお前の横つ面を張り飛ばして、コーラルとは正反対の方向へ消えてやる」

お手上げである。

男は自分の髪をくしゃくしゃに掻き回し、両手を挙げて降参した。

「わかった。俺の負けだ。いさぎよくお前の厚意に甘えよう。とにかく今のままでは身動きがとれんだ」

「最初からそう言っていればいいんだ。軍はいつごろ動かせる？」

「おおかたの配置はすでに定めてある。本当ならとうに出発できていた」

少女は領いて、

「今日で四日。ちょうどいい長さだ。伯爵を救うか、それとも見捨てるか、国王は苦悩して動けなかったのだと連中は判断するだろう」

「悩んだことは確かだぞ」

「自分で行くか、ぼくに行かせるかでだろ？ 悩みの種類が違う」

「確かに」

「そう思わせておこう。君はこのままマレバへ軍勢を進めるんだ。ただし、ゆっくりだよ。あくまで悩んでいるようにみせかけるのを忘れないように。その間にぼくはコーラルへ向かって伯爵を救出する」

男は低く笑った。

「お前が言うとは難事が難事でないように聞こえるから不思議だな」

「難しいことには違いないよ。誰かの手を借りなきゃならないからね」

「どういふことかと聞き返そうとしたが、少女はそこで勢いよく泉に飛びこみ、衣服を置いた岩場に向かった。」

「来いよ、詳しいことを相談しよう」

どちらが王だかわからないと思しながら、男は少女の言葉に従った。

その日の夜。日課となった軍議の場で、少女は個人の意志としてフェルナン伯爵の救出に赴きたいと発言した。

ただし、自分一人では無理なので、誰かに手を貸してもらいたいという条件つきである。

その場にいた人々は皆、一様に驚いていたが、この前のように血相を変えて止めたりはしなかった。ただ、ドラ將軍が静かに問いかけた。

「それは陛下のご命令か？」

「將軍。ぼくは誰の指図も受けない」

少女が断言し、国王も言葉を添えた。

「いかにも。バルドウの娘に命令などできるはずがない。頭を下げて頼んだのだ」

將軍がため息をつく。

フェルナン伯爵は確かに国王の後見人ではあるが、もともととは単なる地方貴族だ。危険を冒してまで救

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。